〔島根県立大学松江キャンパス研究紀要　Vol. 62　121～130(2023)〕

大学附属児童図書館の展望（2）
― 文教大学・日本社会事業大学・聖徳大学・福島学院大学 ―

マユー　あ　き　　岩　田　英　作
（地域文化学科）

Prospects for University-Affiliated Libraries for Children（2）
―Field Research of Additional Four Libraries―

Aki Mahieu, Eisaku Iwata

キーワード：児童図書館、地域交流の場、読み聞かせ
Libraries for Children, Community Exchange Locations, Reading to Children

1．はじめに

筆者は、2006年に絵本の読み聞かせを近隣の小学校や幼保園で実践する授業を立ち上げ、2010年には、その活動拠点となる児童書専門図書館「おはなしレストランライブラリー」を開設し、運営にあたってきた。

大学附属の児童図書館は全国的に見ても数は少なく、2022年現在でその存在を把握しているのは、以下に挙げる10館である。

①北海道武蔵女子短期大学附属図書館児童図書室（1976～）
②京都芸術大学芸術文化情報センターこども図書館「ピッコリー」（1978～）
③文教大学付属図書館あいのみ文庫（1982～）
④鳴門教育大学附属図書館児童図書室（1987～）
⑤日本社会事業大学子ども福祉図書館（2000～）
⑥山梨大学附属図書館子ども図書室（2002～）
⑦聖徳大学川並弘昭記念図書館こども図書館（2009～）
⑧関西大学児童図書館（高槻市立中央図書館ミューズ子ども分室）（2010～）
⑨島根県立大学松江キャンパス児童図書館「おはなしレストランライブラリー」（2010～）
⑩福島学院大学認定こども園こども図書館（2021～）

これらのうち、①②④⑥⑧の５館については、2016年に視察調査を行い、本学の児童図書館も加え、６館それぞれの概要と特色をまとめた（岩田・マユー　2016）。また、2022年には、『図書館雑誌』の10月号特集で、大学に設置されている児童図書館（室）全体の概況と役割について述べる機会を得た（岩田・マユー 2022）。

本稿では、新たに、③文教大学、⑤日本社会事業大学、⑦聖徳大学、⑩福島学院大学の児童図書館４館について前回と同様の視察調査を行い、それぞれの概要と特色を中心に報告する。なお、各館の蔵書冊数は、2022年３月末現在の数字を表している。

視察調査対象の大学附属児童図書館とお話をうかがったみなさま

文教大学 付属図書館 あいのみ文庫 1982～	日本社会事業大学 子ども福祉図書館 2000～	聖徳大学 川並弘昭記念図書館 こども図書館 2009～	福島学院大学 認定こども園 こども図書館 2021～
あいのみ文庫代表 柿﨑美枝子さん 学術情報部図書館課 主任司書 藤倉恵一さん	研究・図書館事務室 室長 飯島博司さん（右） 室長補佐 星川英輝さん	図書館事務室長 小澤幹雄さん 文学部准教授 （図書館情報学） 片山ふみさん	認定こども園園長 （こども図書館責任者） 二谷京子さん

2．各大学附属児童図書館の概要と特色

1）文教大学付属図書館あいのみ文庫

1982年、文教大学越谷図書館児童室に開設。蔵書8,065冊。当初、運営は図書館専任職員があたっていたが、1987年に、地域のボランティアによる運営に移行する。2022年現在は、５名のボランティアが運営。開庫は、毎週木曜14：00～17：00（８月は休館）。

⑴ あいのみ文庫開設の背景

文教大学越谷図書館は、現在の建物が1981年に新築されて以来、地域住民に図書館を開放している。当時、大学図書館の学外開放がまだ一般的ではなかったことを考えると、画期的で先駆的な取り組みである。

その新館に児童室を設け、子ども文庫を設置する案も、地域住民に開放する検討過程の中で出されたものだった。直接の契機は、児童文学研究家で童話作家でもあった人間科学部の後藤楢根教授（当時）から、研究室にある児童文学の蔵書を広く学生が利用できるように図書館に寄託したい、という申し出を受けたことにある。加えて、教員側からは、学生が児童文化研究の実践的活動を通して、地域の子どもたちと交流する場を求める声が上がっていた。この２つの事情が相俟って、地域の子どもたちへの開放が提案され、あいのみ文庫が誕生することになったのである。

⑵ 地域のボランティアによる文庫運営

あいのみ文庫の運営は、開庫した初年度は、児童文学に造詣が深い１名を含む２名の図書館専任職員が兼務で担当し、２年目は図書館内で委員会が組織された。しかし、「地域文庫（家庭文庫）的な機能とそれを果たすための場所を志向」（藤倉 2006）する文庫運営と大学図書館の本来業務との兼務は、その業務のあり様が大きく異なるが故に、次第に行き詰まっていく。

この文庫の状況を知って積極的な協力を申し出たのが、地域の母親たちだった。こうして、1987年に、

地域のボランティア４名によるあいのみ文庫の運営が始まった。ボランティアによる運営形態は、途中でメンバーに変更があったものの、今日まで35年の長きに渡り続いている。2022年現在は、５名のボランティアが文庫運営を担い、活発な活動を展開している。

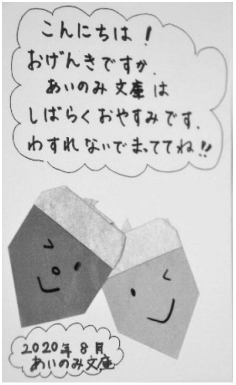
⑶ 手作りの温もりにあふれる文庫活動

文庫活動として、通常の本の貸出に加え、毎月２回のおはなし会、春・夏・冬の休み前のおたのしみ会を行っている。過去には不定期開催での学生による英語のおはなし会もあった。

おはなし会は、素話、読み聞かせ、手遊び、わらべ歌などで構成された30分ほどの内容を、０歳児からと４歳児以上に向けた２種類のプログラムを用意して行われる。

手作りの『はらぺこあおむし』のちょうちょ

年３回のおたのしみ会も、子どもたちが楽しみにしているイベントだ。特に冬はクリスマスのお話に加えてハンドベルでクリスマスの歌を合奏するなど季節感を出した内容となり、時にはミニ・コンサートも企画される。春は１年間の締めくくりとして、文庫によく来た子どもやおはなし会に積極的に参加した子どもに、それぞれ手作りの小さな賞状「あいのみ賞」や「よくききました賞」がみんなの前で手渡される。子どもは恥じらいながらも、自分の１年間の文庫利用に対して温かい励ましを受け、誇らしい気持ちで満たされることだろう。また、おたのしみ会では、参加者全員にボランティアが手作りしたプレゼントが贈られる。それは、子どもたちにとって、おたのしみ会のもう１つの楽しみである。



コロナ禍、子ども達に送られたはがき

あいのみ文庫の活動は、学内だけではない。文庫運営ボランティア独自の活動として、越谷市内の保育所、幼稚園、小学校、児童館、子ども会など地域からの依頼に応え、読み聞かせやおはなし会、カーテンシアターを中心に学外での活動も活発に行われている。

あいのみ文庫の柿崎代表は「地道に、できることを続けてきただけです。」と、あくまでも控え目である。しかし、文庫の運営を担って以来、子どもと本との幸せな出会いを願うボランティアの一貫した思いがあるからこそ、学内・学外を問わず、文庫活動が地域に深く根付いているのだと思う。

文庫の活発で堅実な活動は高い評価を受けており、藤倉（2006、2022）によると、1989年に越谷市から感謝状を、2003年に越谷市教育委員会から越谷市教育功労者表彰、2006年に子ども読書活動優秀団体として文部科学大臣表彰、そして2018年には再び越谷市から長年の活動に対して感謝状を、それぞれ受けている。

⑷ 大人のための講座や勉強会

あいのみ文庫は、子どもだけでなく大人のためにも、様々な講座や勉強会を開催している。具体的には、①乳幼児を持つ親のための「わくわく絵本教室」、②本物の読み手を育てるための「図書ボランティアのための講座・講演会」、③昔話を大人も楽しみ、子どもにも語り伝えていくためのおはなし勉強会「おはなしファラダ」である。過去には情報交

換・交流の場としての「学校図書ボランティアのための交流会」、子どもの本の奥深い豊かさを楽しむ「児童文学を楽しむ会」もあった。

これらのうち、①と②は現在、越谷市や越谷市PTA連合会の後援を受けるなど、関係諸機関と連携して、地域から幅広く参加者を募って行われる。子どもと本をつなぐ大人の力を地域全体として高めていこうとする流れの中で、あいのみ文庫がそのリーダー的働きを担っていることがわかる。

上記①～③の講座等はそれぞれ、①は子育て支援として、②③は文庫のボランティアを含む、子どもと本の出会いに関わる大人の自己研鑽の場、同じ思いを持ってそれぞれに活動している人達の横のつながりを生み出す交流の場として機能している。柿崎代表は、子どもと本をつなぐ活動を、いかなる形であれ受け継いでくれる人を育てようという明確な意識を持って、これらの講座を開いていると話す。文庫のボランティアの中にもこのような勉強会をきっかけに、司書資格を取得したり、学校図書館司書に採用される人も出てきているという。

2）日本社会事業大学子ども福祉図書館

東京都清瀬市にある日本社会事業大学附属図書館内に、2000年に開設。蔵書約7,700冊。常勤５名、非常勤２名（３名は司書）からなる本館職員で運営。開館は、月曜～金曜9：00～16：30、土曜9：00～14：30。

⑴ 日本社会事業大学について

「子ども福祉図書館」と、館名に「福祉」の文字が入っていることが、視察調査の前から気になっていた。その理由を理解するためには、まず、日本社会事業大学について知ることが有益かと思われる。

日本社会事業大学は、1946年に創設された日本社会事業学校が前身で、その後、専門学校、短期大学を経て、1958年に四年制大学となった。厚生労働省（旧厚生省）の委託を受けて、福祉事務所や児童相談所などの行政分野で指導的役割を担う社会福祉従事者を養成する大学である。その後、社会で顕在化していく高齢者問題や障がい者問題に対応するため、社会福祉施設などで福祉に従事するリーダーの養成にも力を傾注することになった。1989年４月に、原宿から清瀬市にキャンパスを移転してからは、民間・行政を問わずますます需要が高まる福祉リーダーの養成に加え、全国各地で新設された福祉系大学のモデル的役割も果たしている。

⑵ 子ども福祉図書館設置の背景

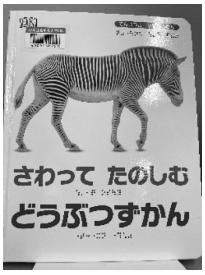
大学の正門を入り、欅や樫などの大木が林立するキャンパスを奥へと進んでいくと、３階建ての白い図書館の建物が現れる。２階がサービスカウンターのあるメインフロアで、利用者はここから入館する。子ども福祉図書館は、そこから階段を下って１階に設置されている。

子ども福祉図書館が設置されたのは、所蔵スペースの確保が必要となったために行われた1999年の図書館３階増築がきっかけだった。社会福祉の研究にとって貴重な戦前・戦後の図書や資料を豊富に所蔵しており、学内だけでなく、学外からも利用されてきていることから、地域の子どもたちも対象にして何かできないかという声が出され、子どもに向けた図書館設置が決まる。作るからには、ほかの子ども図書館とは異なる特色を持ちたいという思いから目を向けたのが、福祉教育の拠点である大学らしく、「福祉」であった。そこには、子どもの頃から読書を通して、ボランティアや介護だけではない幅広い福祉の分野に関心を持ってもらいたいという願いが込められていた。図書館では、「福祉」をテーマに揃えられた児童書の本棚が入り口を入ってすぐ右側に配置され、利用する子どもたちを迎える。名

称に「福祉」の２文字が入っているのは、このような経緯からであった。

⑶ 幅広く揃えられた福祉に関わる児童書

子ども向けの福祉関連の本が並ぶ書棚を見渡すと、「手話」「バリアフリー」「ユニバーサルデザイン」「介護の仕事・介護施設」「子どもの貧困」「難民」などのトピックが目に入ってくる。子ども向けに書かれた福祉を理解する本や様々な障がいへの理解を深める本、ジェンダーフリーの絵本などもシリーズで完備され、さらに、子どもの将来の職業選択に役立つキャリアに関連する本も充実している。



ほかの子ども図書館ではあまり見かけない点字つき絵本や、L.L.ブックもある。L.L.ブックの「L.L.」とは、スウェーデン語の‘Lättläst’（レットレースト）（英語：‘easy to read’）の略で、誰もが読書を楽しめるようにいろいろな工夫が施されたやさしく読みやすい本のことである。一見すると絵本のように見えるが、日本語が十分ではない外国にルーツを持つ人、知的障害のある人、認知症の高齢者など、やさしく読める本を必要とする大人を対象に作られた本だ。子どもは点字絵本やL.L.ブックを実際に手に取り、本の世界で取り組まれている福祉支援を体験できるのである。

⑷ 多様な背景を持つ子どもへの眼差し

子ども福祉図書館には、「福祉」についての知識や理解を深める児童書だけでなく、地域の様々な背景を持つ子どもたちのために、福祉的な観点から所蔵されている本もある。

例えば、外国籍の子どもたちが利用できるように、英語、中国語、韓国語、タガログ語の外国語絵本が集められている。日本の絵本とそれを複数の外国語に翻訳したものも数種類あり、それらが表紙を見せて並べられ、利用者の目を引く。

また、図書館には珍しく、コミック本もシリーズで揃えられている。地域にいろいろな事情を抱えた家庭の子どもがいることを考えての配架である。子ども福祉図書館は、子どもの居場所づくりの一環としても位置づけられているのだ。

⑸ 今後の課題として

子ども福祉図書館は地域の子どもやその保護者のほか、保育園や特別養護学校からも広く利用されてきたが、コロナ禍のために、利用者がここ数年急減した。これまで以上に広くPRし、利用者を呼び戻したいところだ。

また、点字絵本やL.L.ブックをもっと充実させたり、学生が利用者の子どもと関わる仕組みについても工夫していきたいという。

３）聖徳大学川並弘昭記念図書館こども図書館

2009年９月、聖徳大学（千葉県松戸市）の川並弘昭記念図書館の新築に伴って開設。蔵書約13,000冊。月曜日から土曜日開館。聖徳大学の学生・教職員を対象に閲覧・貸出を行う。

⑴ こども図書館設置の背景

聖徳学園の歴史は、1933年、川並香順・孝子夫妻が東京で設立した「聖徳家政学院」と「新井宿幼稚園」から始まる。当時、夫妻の長女が２歳で夭折し、夫妻の心に「我が子に注ぐ愛情をすべての子に

注ぐ。それが我が子を生かすたった一つの道」との信念が芽生え、以後、女子教育・幼児教育に一層傾注することになったという。

1965年には保育科・家政科からなる聖徳学園短期大学を開学し、以後、４年制大学や大学院を開設し、高等教育機関として発展する中で、「保育の聖徳」としての姿勢を一貫して保持してきた。

図書館の新築にあたってその一角にこども図書館が構想されたのも、聖徳の歴史を振り返って見ると必然のことであったと言っても過言ではない。

⑵ 子どもの利用を考えた環境づくり

聖徳大学川並弘昭記念図書館は全７階からなり、こども図書館は５階に設置されている。いずれの階も、書架や机・椅子、掲示等が整然と配置され、大きなガラス窓の向こうに見えるキャンパスの風景も心地よく、手の行き届いた美しい図書館である。

こども図書館の入り口は、透明のドア・壁面でフロアと仕切ってある。透明な部分には、子どもが誤ってぶつからないように白い模様が施されている。こども図書館の入り口に立つと、館全体を見渡すことができ、さきに述べた図書館全体から受ける印象そのままである。

書架は子どもでも利用しやすいように背丈が低めに設えられており、エッジも安全面を考慮して丸く処理されている。机・椅子も児童用のものがそろっていて、同フロアには児童用トイレや授乳室が完備されている。まことに子どもやその保護者の利用を念頭に置いた環境づくりが徹底されていて、聖徳における幼児教育の伝統を垣間見る思いがする。

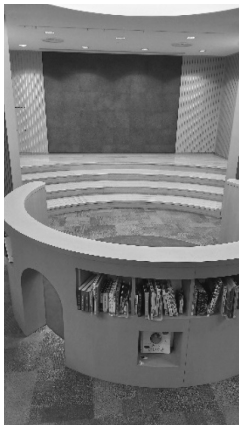
⑶ ３つのワクワクする空間

こども図書館には、絵本の配架スペースを囲むように、３つのワクワクする空間が用意されている。

①おはなしのへや

読み聞かせやストーリーテリングなど、おはなしを聞くための部屋である。床はフローリング仕様で、靴を脱いで座ったりゴロゴロしながらおはなしを聞くことができる。部屋と絵本配架スペースとは透明な壁で仕切られていて、外からでも部屋の中を見ることができるが、おはなしに集中したい時には遮光カーテンで仕切ることもできる。おはなしのへやに子どもに交じって乳児がいる場合、乳児の安全を確保するために、ガラス張りの間仕切りも用意されている。間仕切りの内側に乳児とその保護者が入れば、保護者は乳児の心配をすることなく、おはなしを楽しむことができる。

②表現の舞台



①おはなしのへやと③たいけんのへやに挟まれて、こども図書館の中央奥に設けてあり、階段舞台とその手前に円形に敷かれた鮮やかな緑の芝生調カーペットでできている。サッカー競技場をイメージして作られていて、たとえば、芝生の上でなんらかの演目が披露され、階段を観覧席として用いて芝生上の演目を鑑賞するといった使用方法が想定されている。そのほか、日本の季節行事を彩る「お正月」「雛飾り」「七夕飾り」や郷土玩具などの展示スペースとしても有効に活用されている。

③たいけんのへや

部屋をのぞいた瞬間、ワクワク度がマックスになりそうな仕掛け満載の部屋である。白い壁には、ゾウやキリン、パンダにペンギンにワシなどの実物大のシルエットが黒く鮮やかに描かれ、足元に目をやればそれらの動物の足跡がやはり実物大で床のあち

らこちらに描かれてある。天井を見上げれば、放物面の窪みが中央にあって、音の反射を楽しむことができる。名付けて「ひそひそ天井」という。筆者もためしに窪みの下にもうひとりと一定の距離を置いて立ち、相手に聞こえないくらいの「ひそひそ声」を発してみたところ、なんと相手の耳には明瞭に筆者の声が届いたではないか。そのほか、空気砲、影絵あそび、磁石あそびなど、30種類を超える科学遊びの道具が用意されている。

⑷ こども図書館と学生との関わり

こども図書館と学生との関わりは、授業を通しての関りとアルバイト・ボランティアとしての関りに大別される。

授業を通しての関りについては、学生の読み聞かせやおはなし会の実習の場としての利用が最も多い。保育士養成課程、司書資格課程（児童サービス）、看護師養成課程（小児看護）など、さまざまな資格と結びつけて、絵本や「おはなしのへや」が利用されている。こども図書館では外国語の絵本も配架しているが、これらは大学での英語教育に活かされている。「表現の舞台」に展示される日本の伝統的な装飾品や玩具については、学芸員養成課程の授業で民俗資料の取り扱いの学習に利用されることもある。

アルバイト・ボランティアとしての関りについては、コロナ禍においては難しくなったが、ようやく再開の兆しが見え始めてきた。筆者が見学に訪れた2022年９月時点では、有志学生８名と図書館との共同企画として、２つのテーマ展示「飛び出す！動く！しかけ絵本」「かわいいは最強！かわいい絵本集めました」が開催中だった。

テーマ展示「かわいい絵本」

⑸「本物教育」とこども図書館

聖徳学園の教育の柱の一つに、豊かな心を養うための「本物教育」がある。キャンパスのいたるところに配置された壁画や年間30回に及ぶ音楽コンサートなど、日々の学園生活の中で本物の芸術に触れる機会・環境が豊富に用意されている。筆者が訪れた際にも、「大学所蔵名品展」として２つの展示会「不思議の国のアリス－イギリス児童文学の夜明け－」「百人一首とかるた－書・描・遊－」が開催中だった。アリス展では、1866年の初版本をはじめ、ダリやローランサンの挿絵による書籍やガラス製の幻灯機用スライドなど、さまざまな『不思議の国のアリス』が並び、それ以外にも『宝島』『幸福の王子』『ピーターパン』など児童文学の古典的名作の初版本が列をなして展示してあった。

聖徳大学におけるこども図書館は、先に述べた「幼児教育」の伝統とともに、この「本物教育」の考え方からも位置づけることができるように思われる。児童図書館として申しぶんのない環境で、たくさんの絵本作品と魅力的な部屋・舞台を活用して、今後も利用者の心に豊かな潤いがもたらされることが期待される。

４）福島学院大学認定こども園こども図書館

福島学院大学（福島県福島市）の敷地内にある認定こども園に併設して2021年10月に開設。蔵書約600冊。こども園の保護者や地域の住民を対象に毎週火曜・木曜に開館、絵本の貸し出しを行う。大学附属の児童図書館としては最も新しい。

⑴ こども図書館設立の背景

福島県いわき市の日本海を見下ろす高台に絵本美術館「まどのむこうのそのまたむこう」がある。建築家安藤忠雄氏の設計で、2005年に開館した。福島学院大学の桜田葉子理事長・学長は、壁一面に何百という絵本が表紙を見せて並ぶこの美術館に触発され、子ども図書館の着想を得た。

福島学院大学では、こども学科（４年制）と保育学科（短期大学部）の両学科で保育者養成を行っており、子ども図書館の設置は大学の教育内容から見ても、きわめて自然なことのように思われる。

ハード面において、こども園の隣に、かつて預かり保育に使用していた、おしゃれな洋風建築物があったことも大きな後押しとなった。

子ども図書館を開設した2021年、福島学院大学はもうひとつの取組を開始した。「ふくしま子どもの心のケアセンター」（一般社団法人福島県精神保健福祉協会・福島学院大学駅前キャンパス内）において、その年の４月から福島県立医科大学と連携し、東日本大震災後の子どもたちの心の支援活動を行っている。

福島学院大学では、福島の子どもたち、ひいてはその家族、その地域の支援を大きな目標として掲げられており、子ども図書館の設置もその流れの中に位置付けることができる。

⑵〈絵本の家〉と呼びたい図書館

福島学院大学のこども図書館の特色としてまず挙げられるのは、その建物である。洋風建築２階建てで、もともと図書館として設計されたものではなく、一般の民家のように、台所もあればシャワールームもあり、フローリングの部屋もあれば畳の部屋もある。絵本は書架に収まっているわけではなく、その部屋ごとに壁に立てかけてあったり、テーブルの上に並んでいたり、階段の両端に置いてあったりする。すべての絵本が面出しで並んでいて、絵本美術館「まどのむこうのそのまたむこう」を髣髴とさせる。部屋に足を踏み入れると、絵本がまるで部屋の住人であるかのような印象を受け、図書館という言葉で言い表すよりも、〈絵本が暮らしている家〉とでも呼んだほうが、その雰囲気に合っているように思われる。

子どもたちがこのこども図書館を訪れたなら、宝物探しをするかのように部屋という部屋を行ったり来たりしながら絵本と触れ合う姿が容易に想像できる。おまけにこの建物には、子どもふたりくらいがやっと入れる小さなスペースやロフトもあり、子どもの遊び心をくすぐる要素に事欠かない。

⑶ 学生サポーター

福島学院大学には学生サポーターの制度があり、現在、こども学科の学生５名がサポーターとしてこども図書館の絵本整理や貸出業務を担当している。学生サポーターからは、「子どもたちと直接触れ合える機会が増えてうれ

学生サポーターの活動の様子

しいです。」「子ども図書館の運営に携わることで、子どもの様子だけでなく、こども園の先生の保護者対応や保護者同士の関わりなども観察できます。授業とは一味違う貴重な学びの時間になっています。」などの声が寄せられている。

⑷ 読み聞かせプロジェクト

福島学院大学では、絵本の読み聞かせを通して学生と子どもの双方の感性や言葉の力を培い、さらにはこども図書館が地域における読み聞かせの拠点となることを目指して、「読み聞かせプロジェクト」を以下の４項目に従って進めつつある。

①読み聞かせ学習会

学生の読み聞かせの技能向上を図るため、授業の中に位置づけて行うもので、すでに元福島県立図書館司書を講師として開始している。

②地域の子どもたちへの読み聞かせ活動

こども学科の２年生が、大学近隣にある福島市立瀬上（せのうえ）小学校の１・２年生を対象に、2022年９月から「朝の読書タイム」で読み聞かせを始めたところである。短期大学部の保育学科では、すでにこども図書館で小規模ながら読み聞かせを実践してきたが、2022年10月からは福島学院大学のこども園で組織的に読み聞かせ活動を実施する。

③読み聞かせ研究会

福島市内の読み聞かせサークルや学校司書によるこども図書館の視察をはじめ、絵本・児童書の選書や配架の仕方、読み聞かせの仕方などについて理解を深める研究会を行う。

④こども図書館の魅力創出

子どもたちにふさわしい絵本や珍しい絵本を定期的に購入し、こども図書館のさらなる魅力化を図る。

⑸ こども園での絵本を活用した取組

こども図書館の管理・運営責任者でもあるこども園の二谷京子園長は、こども園での保育の中で、絵本を活用した魅力的な取組を実践している。

絵本の読み聞かせを出発点として、絵本の作品世界を工作によって立体的に表現し、工作物の展示を経て、工作物を用いた劇発表会を行い、最終的には、クリスマスに元となった絵本を園児にプレゼントするというものである。１冊の絵本を多様な手法で享受し、最後はもとの絵本に帰っていく。この一連の過程で、子どもたちの想像力がいったいどれだけ刺激され、絵本の世界が子どもたちの中に深く刻まれていくことか。こども図書館が今後さらに充実していくことに比例して、こども園でのこのような取組がより活発になされることが期待される。

作品展の一例「どうぞのいす」

⑹ 今後に向けて

福島市の令和４年度「特色ある幼児教育・保育プロジェクト」に、福島学院大学認定こども園の「ふれる・感じる・考える『こども図書館』～心のバリアフリーの素地を育む～」が選定された。福島学院大学では、今後、こども図書館を活用して、子どもたちが絵本に親しむ機会を拡充し、特に障がいや様々な文化や価値観を含む絵本の選書・活用に力を入れて取り組んでいく予定である。

福島学院大学のこども図書館は、まだ始まったばかりである。しかも、コロナ禍の中でのオープンとなり、ままならないことも多かったはずである。しかし、そうした中にあっても、読み聞かせプロジェクトや上記のプロジェクトなど、大学一体となって子ども図書館の活用に向けて力強く動き出したところだ。今後の展開が楽しみである。

３．４館のまとめ

今回あらたに視察を行った４館も、単に児童書が置かれている場所に留まらず、岩田・マユー（2016）で抽出した様々な機能を担う場となっていた。

文教大学あいのみ文庫における定例のおはなし会や保護者向け絵本教室などの地域に密着した文庫活動、日本社会事業大学の地域の実情を加味した蔵書

構成による子どもの居場所づくりは、それぞれ、直接的・間接的な子育て支援となっている。

教育の場に重きを置いているのは聖徳大学で、様々な資格と結びつけて、絵本や「おはなしのへや」が授業で利用されている。福島学院大学で始動した「読み聞かせプロジェクト」も、子どもと学生双方に向けた教育目標を掲げ、子ども図書館がその拠点としての機能を担うことを目指している。

また、福島学院大学の学生サポーターが言うように、児童図書館は学生が地域の子どもたちと自然な文脈の中で交流できる場でもある。これこそ、大学附属児童図書館の大きな魅力の１つであろう。

４．大学附属児童図書館調査を振り返って

岩田・マユー（2016）で取り上げた６館を加え、10館全体を見渡してみると、大学附属児童図書館と一口に言っても、その中身は実に多様であることがわかる。設立の経緯、運営形態、活動内容、教育・研究との関りなどで重なり合うところもある一方、各大学の特色や地域の実情が色濃く反映され、各館の特徴や持ち味となっている。「お互いの存在を強く意識することもなく、それぞれがそれぞれの地域で独自に活動している」（岩田・マユー 2016：183）現状において、その多様な在り様を知ることができたのは、視察調査における大きな収穫であろう。他館で行われている様々な取り組みや工夫だけでなく、課題やその対応などを知ることは、それぞれの館の運営にとっても参考となり、可能性を広げるヒントともなり得る。

将来、お互いが連携し、交流を通して情報交換ができる場を作ろうという気運もひょっとしたら生まれてくるかもしれない。そういう日が訪れるまで、本稿がお互いを知り、自らを振り返る１つのささやかな手がかりとなれば幸いである。

謝辞

視察調査および本稿執筆に際し、４館の皆様のご親切な対応とご協力を賜りましたことに深く感謝申し上げます。なお、写真掲載については承諾を得ていることを申し添えます。

引用・参考文献

岩田英作・マユーあき（2016）.「大学附属児童図書館の展望－６館の比較を通して－」『島根県立大学松江キャンパス研究紀要』第54号，pp.183-192.

_____（2022）.「大学にある児童図書館（室）の概況と役割」『図書館雑誌』10月号，pp.592-595.

片山ふみ（2022）.「こども図書館における体験的学び」『図書館雑誌』10月号，pp.598-599.

社会福祉法人　埼玉福祉会L.L.ブックのサイト「やさしくよみやすい本－L.L.ブック」（https://www.saifuku.com/shop/llbook/index.html　最終アクセス日：2022年９月23日）

聖徳大学ホームページ「聖徳の教育」（https://www.seitoku-u.ac.jp/gakuen/wa0801/　最終アクセス日：2022年９月22日）

_____「歴史と沿革」（https://www.seitoku-u.ac.jp/about/history/　最終アクセス日：2022年９月22日）

日本社会事業大学ホームページ「理念と沿革」（https://www.jcsw.ac.jp/about/rinen/enkaku.html　最終アクセス日：2022年９月23日）

日本社会事業大学附属図書館『Library Guide』

藤倉恵一（2006）.「文教大学越谷図書館における学外開放」『大学図書館研究』第76号，pp.21-31.

藤倉恵一（2022）.「文教大学越谷図書館とあいのみ文庫」『図書館雑誌』10月号，pp.596-597.

文教大学付属図書館あいのみ文庫（2004）.『ひとあし ひとあし』

_____（2008）.『文教大学あいのみ文庫　2007年度 第１回 連続講座・まとめ』

_____（2017）.『文教大学あいのみ文庫　2015年度 第９回 連続講座・まとめ 通常活動』

（受稿 2022年９月30日，受理 2022年11月９日）